

あった。更には熊本大学の大学院に進学することを勧めて頂き、その後の指導も引き受けて頂けるとの、その当時の私にとっては夢のような出来事が、矢継ぎ早に起こった。院試に向けて精を出したのは言うまでもない。有難いことに大学院の文学研究科への入学の許可をもらい昭和五十二年の四月より熊本での学究生活が始まった。

当時の熊本大学文学部は博士課程を有しておらず修士課程の二年間だけだったため、可能ならば一年間延長して三年間をかけてじっくり研究に専念してもらいたい旨のことを入学時に聞き、それならば三年間という時間を使って地道に精進しようとの心に決めた。入学後、金原先生の研究室で一对一で、日本漢詩文の訓み方を徹底的に教えて頂いた。菅原道真の義父にあたる嶋田忠臣の漢詩集『田氏家集』を一首ずつ解釈していくという演習の中で、とりわけ時代考証の仕方、「国史」等の資料の活用の仕方等、無知な私に根気強く、基礎から手ほどきをして頂いた。大学での勉強がいかにいい加減で、又危ういものであったか、金原先生の教示を受けながら痛感した。金原先生の立場に立てば門を叩きに來た者に教えを施すにも、余りにその人間が無能であれば、失望を越えて憤りを覚えるような有り体の私に、いつも紳士的に接して頂き、私の研究意欲をそぐことのないような配慮をしていただいた。その後、幾度も研究において挫折感を味わい、又、研究そのものに頓挫しかけながらも、何とか今まで続けてこられたのは、あの大学院時代の慈愛に満ちた励ましや、忍耐強く、私の再起を待ち続けて頂いた金原先生のお姿が目に残っているからである。衷心より感謝申し上げる。

その一方で、私が菅原道真と白居易の漢詩文の比較を、その当時研究対象にしていたことの配慮により設けられた中国古典文学の専門家であられた西岡晴彦先生との一对一の演習により、その後の私の研究生活に大きな指針を得た。けっして忘れることの出来ない有難い、至福の時間であった。私一人のために、西岡先生のみならず教育学部の、同じく中国古典文学語学の専門家であられた野口宗親先生も私のこの演習に毎回出席頂き、私の拙